

くりの中間台利用による低樹高栽培

(園試果樹部)

1. 背景とねらい

くりの栽培は、通常、山栗、実生等の台木を用いている。これらの台木は喬木性で、10年以上では6～7mと樹高が高く、樹冠の拡大が進む。このため、剪定等も容易でなく、結実部位も樹冠外部が中心となり、低収につながる。

そこで、中国栗の中間台を用いることで、樹勢が落ちつき、低樹高栽培ができるなど品種によりわい化性が見られるなどの知見が得られたので指導上の参考に供する。

2. 技術内容

1) 中国栗中間台を用いると、品種によって多少異なるが、樹勢が落ちつき共台に比べ、樹冠は小さくなる(第1～4表)。

2) 中国栗中間台木使用樹は、わい化し樹冠が小さくなるので、共台使用樹の場合よりも密植する(50～60本/10a)。樹冠の拡大とともに漸次間伐を行う。

3) 中間台は、30cm程度の長さで、台木の地上50cm程度に挿入する。

4) 凍寒害防止のため、接ぎ木部は50cm以上、主枝の分岐は地上70cm以上とする。

5) くりは、自家不和合性があるので、授粉樹の混植が必要である。なお、風媒によって受粉するので、風向き、風の強さによるが、授粉樹との距離は9m以内が良い。

6) 適応地域

県下全域

3. 指導上の留意事項

1) 中国栗中間台は、共台に比べ接ぎ木不親和等による枯死の発生が見られる。

2) 1～3年生の幼木は、枝が徒長気味に生育すると凍寒害の恐れがあるので、多肥にならないよう注意する。

3) 凍寒害を受けた部分は、胴枯れ病等の原因となるので、削り取って癒合剤で保護する。

4. 試験成績概要

第1表 くりの台木別樹高（昭和63年）

供試品種	供試台木	樹齡(年)	樹高(m)	新梢長(cm)
伊吹	中国栗／山栗	5	2.8	24.5
伊吹	山栗	5	2.5	28.0
銀寄	中国栗／山栗	5	2.6	27.3
銀寄	山栗	5	3.3	40.2

第2表 くりの台木別生育（平成5年）

供試品種	供試台木	樹齡 (年生)	樹高 (m)	樹幅(m)		樹容積(比%) (m ³)	幹周 (cm)	新梢長 (cm)
				樹間	樹列			
伊吹	中国栗／山栗	10	3.9	5.5	5.0	55.0(86.8)	46.1	16.2
伊吹	山栗	10	3.8	5.5	5.7	63.4(100)	45.2	13.5
銀寄	中国栗／山栗	10	4.5	5.7	5.1	68.2(66.0)	52.4	15.9
銀寄	山栗	10	4.7	6.6	6.4	103.3(100)	63.6	17.8

第3表 くりの台木別生育（平成6年）

供試品種	供試台木	樹齡 (年生)	樹高 (m)	樹幅(m)		樹容積(比%) (m ³)	幹周 (cm)	新梢長 (cm)
				樹間	樹列			
伊吹	中国栗／山栗	11	4.1	5.7	5.6	69.5(95.7)	52.2	23.5
伊吹	山栗	11	3.9	5.6	6.2	72.6(100)	48.7	19.4
銀寄	中国栗／山栗	11	4.7	6.8	6.3	108.1(86.2)	65.5	22.6
銀寄	山栗	11	4.8	7.2	6.9	125.4(100)	63.0	22.9

第4表 台勝ち台負け程度（平成6年）

供試品種	供試台木	樹齡 (年生)	幹周(cm)		
			穂品種	中間台	台木
伊吹	中国栗／山栗	11	52.2	49.7	56.2
伊吹	山栗	11	48.7	—	57.5
銀寄	中国栗／山栗	11	65.5	56.5	67.5
銀寄	山栗	11	63.0	—	75.5

注) 幹周の調査部位 穂品種：接ぎ木部から20cm上, 中間台：中間台木の中間
台木：接ぎ木部から10cm下